

第9回こうち介護の日
ポスター・作文コンテスト

受賞作品



「かぞくでささえあおう」
高知市立大津小学校 2年
上田 さくらさん



中学の部
最優秀

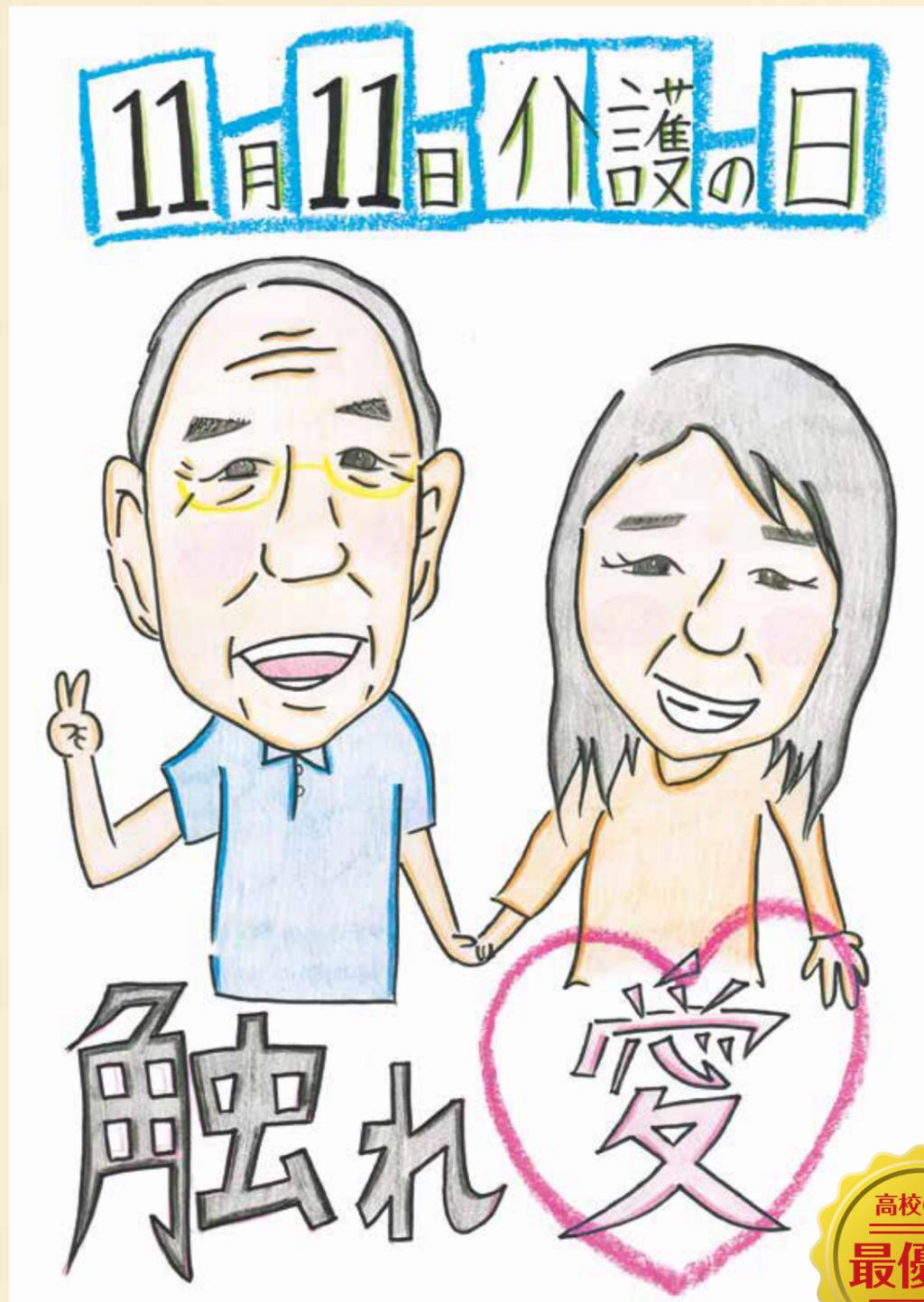


「共に温かい時間」
土佐市立土佐南中学校 3年
濱口 はまくち そよぎさん



高校の部
最優秀

「笑顔は大切」
高知県立春野高等学校 2年
松岡 まつおか ことね 采音さん



「触れ愛」
高知県立春野高等学校 2年
岡 風花さん



「考える、人としての在り方」
高知県立城山高等学校 3年
西内 愛美さん



「孫と祖母のきずな」
土佐市立宇佐小学校 6年
瀧本 心響さん



「あふれるえがお」
四万十町立影野小学校 5年
岡山 和可さん



「えがおとともに」
四万十町立影野小学校 6年
武市 諒明さん



「笑顔を忘れないで助け合おう」
四万十町立影野小学校 6年
西村 涼花さん



中学の部
優秀

「よく見てあなたの身の回り」
高知市立義務教育学校土佐山学舎 8年
かずさ れいな
上総 伶奈さん



中学の部
優秀

「やさしさとおもいやりの心」
須崎市立須崎中学校 3年
ささおか ほまれ
笹岡 芳希さん

中学の部
入選

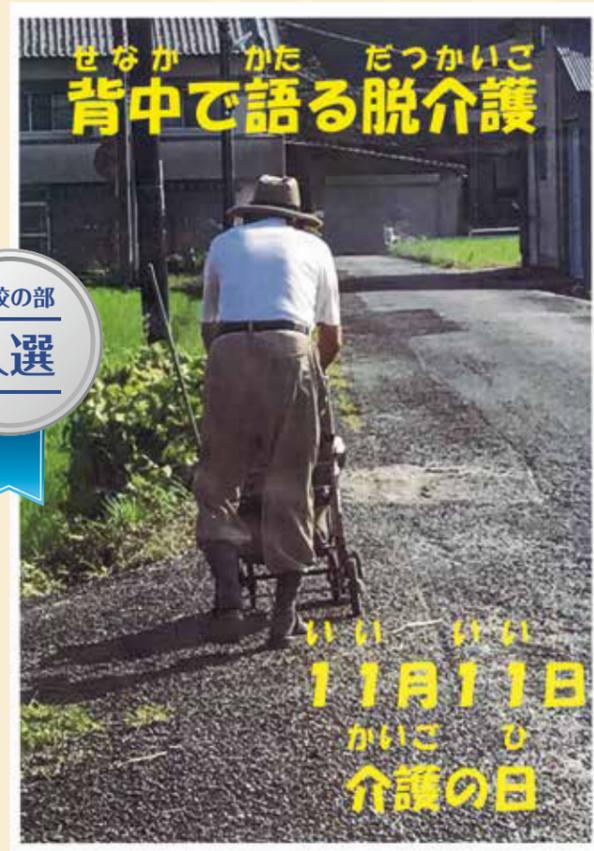


「話をたくさんしてね」
津野町立東津野中学校 3年
ひさかわのあ
久川 乃愛さん



中学の部
入選

「手をさしのべよう」
須崎市立須崎中学校 3年
なかがわ ゆめか
中川 夢海さん



高校の部
入選

「背中での介護」
高知県立宿毛高等学校 2年
久能 藍里さん



「いつまでもスマイル！」
高知県立春野高等学校 2年
池 愛理さん

高校の部
入選

『高れい者体験をして』 南国市立久礼田小学校 六年 橋田 幸芽さん

小学の部
最優秀

私は学校で高れい者体験をしたときから「高れい者」について考えるようになりました。高れい者体験は、南国市社会福祉協議会の方が来てくれて、実際に高れい者の体験をするというものです。「うらしまたろうセット」を使って高れい者を体験しました。約四キログラムの重りや耳せんなどをつけました。その中でも一番大変だったのは、ひざがまがらなくなるサポーターと視野がせまくなるサングラスでした。ひざがまがらならないと歩けないし目が見えにくかったら紙に書かれています文字も見えません。(不自由だし不自由だな)と思いました。うらしまたろうセットをすべて身に付けた状態でひも結びとお茶を飲みました。ひも結びは、分厚い手袋のせいでうまく穴に入りません。お茶を飲むのは、視野がせまくなるサングラスのせいで介護してくれている友達に、「まけるでー!」といわれました。お茶がまけそうになるくらいまで入れていたことに気がつきませんでした。この二つが終わって、つえを持って階段を上ったり下ったりしました。だんがどこにあるか分からないので怖かったです。介護してくれている友達が早く行っていたので、「待って〜!」と言いながら追いつきました。上りの階段の時に転んでしまいました。次は、介護してくれた友達に身に付ける番です。友達も、豆つかみとお茶を飲むことをしました。豆つかみは大変そうでした。階段を上り下がりする時、私は介護をしました。今はかん単に上れますがうらしまたろうセットを身に付けた時は本当に怖いと思いました。この体験で高れい者の方は、(本当に大変なんだな)と思いました。

私のおばあちゃんは、とても元気ですが、「私のおばあちゃんが歩けるのも後ちょっとで。おばあちゃんを介護するときは、幸芽も手伝ってよ。」とお母さんに言われています。高れい者体験をした私は、(絶対におばあちゃんを介護する!)と心に決めています。そのためには、介護の勉強が必要なので、がんばって勉強したいです。

高れい者体験をして、「高れい者の方は、大変不自由な生活を送っている。私たちが笑顔で話しかけたりして外に出る機会を作ってあげなければいけない」ということと、「介護をしてあげる」ということを学びました。次の日からは、「おはようございます!」と高れい者の方に元気にあいさつをしています。私のおばあちゃんには、「階段は注意してよ。」という声をしています。おばあちゃんを介護できるように勉強をしたいと思います。

『高齢者への私の思い』 高知県立嶺北高等学校三年 西村 萌花さん

私は、昨年より祖母と同居しています。十数年前に祖父が亡くなり、それから祖母は一人暮らしをしていました。祖母は、持病が悪化したため入院しましたが、退院後私の家に引っ越して来ました。家族と一緒に暮らす事で祖母の精神面と体調面が安定し、「引っ越して来て良かった」と言ってくれています。このことから私は、高齢者と家族が同居することが一番良いことだと考えていました。しかし、土佐町の社会福祉協議会にインターンシップへ行っただけで、その考えを改めることになりました。傾聴ボランティアで訪ねた方は、身寄りの人に頼れずなんとか一人で生活をしていらっしやいました。様々な事情から、家族と一緒に暮らすことができない方がいらっしやる現状を知りました。

そこで、一人暮らしの高齢者の方にとのような手助けが必要なことを知るためにミニデイや、地域包括支援センターなどに行きました。ミニデイでは、いきいき百歳体操と一緒に体験してみました。準備体操からすでにハードで驚きました。また、みんなで料理をしたり、食卓を囲んで談笑したり、輪投げや、折り紙などをして皆さん本当に楽しそうでした。「この人らあと話したり、遊んだりできて幸せや」とおっしゃっていました。このように高齢者の方が心地よく過ごせる居場所をつくるのが大切だとわかりました。

また、地域包括支援センターでは、六十五歳以上の方を対象とした「いかあ〜ね」のエアロビクスを体験しました。けっこう激しくて、私は息切れしていたのにもかかわらず、周りの高齢者の方たちは、清々しいお顔で帰られていたことに驚きました。このような活動を積み重ねることで筋力をアップさせるだけでなく、楽しく会話することで心を癒し健康に過ごすことができるそうです。その結果、介護認定率が減少したことを聞き、介護予防の大切さを実感しました。また役場の方が「民生委員だけでなく町内の店などからの通報があり、地域で高齢者の見守りができている」と自慢げに話されていたことが印象的でした。確かに私の地元では、近所でのコミュニケーションがとれており、お互い助け合い協力ができるコミュニティがあります。これは、当たり前のことだと思っていました。それは、ここ嶺北地域の素晴らしい強みなのだといいことを知りました。また、高齢者が家族と共に暮らす事ができない場合でも、高齢者の居場所や生きがいを作り、地域との連携を図ることで、高齢者が元気に過ごすことができるということがわかりました。

これらの経験を通して、私は将来地元に戻り、この町の強みを生かして地域と連携し、高齢者が健康で暮らしやすいコミュニティ作りをすることで、それぞれの方が抱える課題を解決に導けるような社会福祉士になりたいという思いが強くなりました。

『皆が小さな介護士に』 いの町立吾北中学校三年 近澤 星音さん

今、介護士の数が減少の傾向にあります。「介護士」という仕事は、人の命を支えるという

重要な役割があると僕は思います。責任があり、やりがいを感じる仕事だとは思いますが、その分、仕事がつらく、大変でやめてしまう人もたくさんいると聞きます。しかし、高齢化が進み、高齢者が増えている日本では、介護士のように高齢者をサポートする存在が今まで以上に必要とされていると僕は思います。

介護士が減っていく中、僕たちに何ができるでしょうか。何の専門知識がなくても、僕にもできることがあるはずです。

僕は、介護士でなくても、身近な高齢者をサポートすることは僕にもできるのではないかと思います。誰でも平等に年をとります。僕だって五十年後には間違いなく高齢者の一員です。中学生の孫にお世話になっているかもしれないし、僕も。そして、介護を受けているかもしれないのです。

どうして、僕がこんなに介護に興味があるかという、僕には、もうすぐ百歳になる曾祖母がいるからです。曾祖母はまだまだ元気で、一人で外を歩けるし、会話も十分にできます。曾祖母が住んでいる家は、僕の家のすぐ隣にあります。元気だとはいっても、若いころのように体は動かなくなるだろうし、いつまでも何でも自分でできるとは限らないからです。僕が少しでも介護の方法やサポートの方法を知っていれば、曾祖母のために役に立てられるかもしれないからです。散歩と一緒に歩くことも、サポートの一つかもしれないし、僕には平気な段差や石ころでも、曾祖母にとっては大きな段差であるかもしれないからです。会話をすることだって、僕にできるサポートの一つだと思えます。「介護」と変に身構えなくても、僕にできるサポートを曾祖母に対して愛情を持ってあげることが実は一番大切なのではないかと思えるようになりました。

学校の行事で、高齢者介護施設に行って勉強できる機会があれば、いいなと僕は思います。その体験を機に、介護のことをもっと知りたいと思える中学生がきつと増えるはずです。

僕は来年高考生になります。曾祖母にしてみたら、僕にできるサポートを曾祖母に対して接していこうと思います。僕たちは誰でも心がけひとつで、小さな介護士になれると思います。



『文字盤ノート』

土佐女子中学校三年 濱田くるりさん

中学の部
入選

夏休み、二年前に亡くなった祖母の家に行った時、勉強机の上に「文字盤でトーク」とネームペンで書かれたノートを見つけました。これは祖母が病気でどの筋肉が動かなくなった時に、祖母が父に意思などを伝えるノートで、読んでみると二年前、私の知らない祖母と父の病院での会話を知ることができました。

二人の会話は「いつてらっしゃい。」や「おつかれさま。」など日常的な会話や、ドラマ、詩、短歌などの祖母の趣味について明るい会話を見ることができました。その一方で「つらい。」「苦しい。」などのおばあちゃんの苦勞も書かれてありました。

私の父は、介護をする前、東京の大変忙しい会社に勤めており、あまり気が長い方ではなく、性格も今より荒れていました。そんな父がある日祖母の介護をするために高知に帰ろうと言いました。そして五年前父が先に高知に帰り、その一年と半年後、私たちも引越しました。

私は父が介護をする中で、祖母とのコミュニケーションをとって大事にしていたこと、それを通して父自身が変わってゆく姿をこのノートを通して実感しました。けんかもたくさんしたそうです。でも父は祖母への親孝行を最後までやりとげました。

父は東京から帰ってきて良かったと言っていました。私もそう思います。私も将来大切な人を介護する、または介護される立場になるかもしれませんが、父のようにいつも相手とのコミュニケーションを大事にしなが、がんばっていきましょうと思います。

『介護』

いの町立吾北中学校三年 上崎千寛さん

中学の部
優秀

僕が介護という言葉を国語辞典で調べると(病気の人やお年寄り、体の不自由な人などの世話をすること)と書かれていた。確かにそうだと思うが、僕は介護とはそれだけのことではないと考えた。

高齢者と生活をする中で身のまわりの世話や手助けすることも大事だけれど、一緒にその空間にいることや話し相手になることも大事だと思う。

また、世話をするだけではなく、本人がやりたいと言ったことは出来る限りさせたり、温かく見守ることが必要だ。

そうすることで、介護をうけている人の申し訳ない気持ちが少しでも軽くなるかもしれないからだ。

また介護を受けている人は申し訳ないと思わずに、困っていることがあったらすぐに言ったり、相談したりすることが大事だ。

介護は一人では出来ないの、家族や身のまわりの人たちと介護を受けている人が協力してこそ本当の介護だと言える。

人間とは協力したり、助け合っていくことで成長でき、生きていくことが出来る存在なので困っていることがあれば人に頼っていいのではないか。

頼られた人は相手のことをしっかり理解して介護をする必要がある。そうすることで、介護する側も介護を受ける側も嫌な気持ちにならないにちがいない。

介護には、介護を受ける人と介護をする人がお互いのことや気持ちをしっかり理解した上で協力して、両者とも嫌な気持ちにならないことが僕は大切だと思う。

もし自分が、介護とは何か分からず、どうしたらいいのかまよったりした時は、その人の話し相手になったり、ただ一緒にその場所にいったりするだけでもいいと僕は思う。その人の心に寄りそえるということが何より大切だ。

『介護について』

土佐女子中学校三年 西村真秀さん

中学の部
入選

私には四人の祖父母がいます。介護は必要なく、皆まだまだ元気です。しかし、将来もしかすると介護を必要とする日がやってくるかもしれません。介護と聞いて私は、介護職は世間から悪いイメージで見られており、排泄物の処理や高齢者を支えたり、時には高齢者の死に直面したりと肉体的にも精神的にも大変な事ばかりと想っていました。けれどもいざ自分の祖父母や身内が介護が必要となった時に自分がちゃんと介護することが出来るだろうか考えると今から介護についてしっかり知っておくべきだと思いました。

私が学校から帰っている時に介護士さんと高齢者の方が歩いているのを見かけました。介護士さんは高齢者の方を支えながら歩いていてすごく大変そうだなと思いました。けれど二人が楽しそうに話をしているのを見て、病院でおばあさんと話した時のことを思い出しました。一緒に話した時おばあさんは何度も同じ話をくり返していました。聞きながら「またさっきと同じ話だ」と思っていました。でも、領きながら話を聞いていると話をしているおばあさんはすごく嬉しそうでした。介護は起き上がりたりするのを手伝ってあげるのほもちろん、ただそばで話を聞いてあげたり一緒にいてあげるのも介護になるのではないかと思いました。介護士さんと話をしている高齢者の方はすごく嬉しそうに見えました。また、介護は介護する相手のことをよく知ることが大切だと思いました。介護する相手が何ができ何を手伝って欲しいのかを理解し、相手の気持ちを考えて一人一人にあった介護をしなくてはいけないと思います。そうでないとただのおせっかいであつたり、自己満足にすぎないかもしれないからです。

現在の日本は「少子高齢社会」といい、年々高齢者の割合が高くなり、それに伴って介護を必要とする人が増えてきています。それに、現在若い介護士が足りず、六十代が、八十代九十代の人の介護をするという「老老介護」の問題も増えてきています。老人ホームのお手伝いに行っている祖母や、お手伝いされている人の中にも八十代後半の方が二人もいると聞き、介護されている側よりも年配の方が介護しているという事実にも驚きました。

介護をする人もされる人も身近にいない私は、今まで介護について深く考えたことはなかったけれど介護についてしっかりと考え、相手のためにした行動が自然と介護になっていたらいいなと思います。介護士でなくても困っている人がいたら自然と手を貸せるようになりたいです。

『曾祖母とのふれあいを通して』

いの町立吾北中学校三年 筒井和香菜さん

中学の部
優秀

介護について深く考えたことはあるのだろうかというのが、この作文を書くにあたってのまず一番の疑問でした。

介護とは何かと問いかけた自分の答えは、「お世話をすること」という辞書的なものしか出てきませんでした。ドラマなどでは高齢者の方がお世話してもらっている場面をよく見ます。介護は大変だという言葉もよく耳にしますし、頭では分かっているつもりでした。そんな自分が嫌で、私はこの夏、自分なりの「介護」の定義を見つけようと曾祖母の所へ足を運びました。

曾祖母の家に着くと、暑い中、私を笑顔で迎えてくれ、「よく来たね」と言ってくれました。素敵な笑顔の曾祖母に、私まで元気をもらいました。八十歳を超えた曾祖母は元気ですし、普通に会話もできますが、立ったり座ったり、歩いたりするのはやはりしんどそうでした。手を差し出すと、素直につかんでくれて「ありがとう」と言ってもらえました。食事も自分でできるし、身の回りのことも自分でできます。私が成長するにしたがって、年々曾祖母は弱っていきます。それは当然のことですが、その姿を見るのはとても悲しくなります。

私が、一日、曾祖母と一緒にいて気づいたことは、相手を優先するという当たり前のことでした。相手がしたいことを察してサポートをしてあげなければ、転倒してしまったり、のどにつまらせたりということにつながってしまうからです。若い私と比べて、不自由なところが増えていく曾祖母の立場に立つことは少し難しいなと思います。しかし、そんな中で、私が嬉しかったことは、やはり曾祖母が笑顔になってくれることでした。話している時、食事をしている時、いつも笑顔でした。誰に対しても曾祖母は笑顔で対応しますが、やはり、身内である私には特別な笑顔で対応してくれたのだと思っています。

世の中には、介護をしている人がたくさんおられると思います。私はたった一日曾祖母と接しただけでしたが、これが毎日となると私のように悠長なことを言っていられないかもしれません。それでも、高齢者にとっては、身近な人とのお話や食事だけでも、生きる源になるということを学びました。笑顔で接して、高齢者にも笑顔になってもらうことがまずは一番の介護だと思っています。

『「県民全員で介護」の考え』

高知県立高知農業高等学校三年 濱田航輝さん

高校の部
優秀

高齢者が病気になるということは、介護状態に近づくということだと思います。私の祖父は私が中学校三年生の四月に入院し、六月に亡くなりました。肺がんでした。入院するまでは、元気いっぱいでした。入院した後、みるみる元気がなくなり、亡くなる間際には、会話が不自由となり、食事でもできなくなっていました。入院生活の中で介護が必要となったのです。そして六月十一日、亡くなりました。それだけではありません。祖父が亡くなったことで祖母は高齢者の一人暮らしになりました。今はまだ元気ですが、体調を崩したり、ケガをしたりした時は、気づきも遅れ、寝たきりになるなど介護状態が近づくことになるのではないのでしょうか。

少子高齢化の進む現代では、一人暮らしの高齢者も増加するはずですが、高知では高齢者の割合が約三十四パーセント、三人に一人が高齢者です。中山間地域はさらに高齢化率が高く、過疎化が進めば、近所に住む人もいなくなり、それは、高齢者の孤独死も生むはず。現在、介護士不足を受けて、様々な方策がなされています。介護士の資格を取っている人も多くなっています。しかし、そのことが充実した高齢者介護にはつながっていません。しかし、そのことが若者が少ない地域では、地域外の人がヘルパーや介護を担うということもありません。「介護します」と突然来られても、知らない人に自分のサポートを任せることに躊躇があるかもしれません。老人ホームに入ることも、周りが知らない人ばかりで人間関係がうまくいかないこともあるのではないのでしょうか。私たち若者でも知らない人の中で「周りの空気を読んで仲良くしなさい」といわれ、誰もができるわけではありません。高齢者ならおさらです。今までの生活や習慣を簡単に変えられないと思うのです。

そんな時は、身内や近所、知り合いの人の力が大切になります。少しでも知っている人なら安心できると思うのです。人生百年の時代とコミニカルなどと言っていますが、そうならば、先は本当に長いと思います。だからこそ、今、介護について考える時だと思えます。介護の資格を持っていない私たちにもできることがあるはず。介護士の仕事だけが介護ではありません。介護は技術だけではなく、思いやりです。大切なのは、思いやりであり、その人への思いなのです。

高齢化が進む高知県で、県民全員が介護を担当しているという気持ちを持つのはどうでしょう。そうすれば、身内だけでなく、地域でも助け合いができます。

『将来の道を決めた母の姿』

高知県立高知農業高等学校三年 大野駿さん

高校の部
優秀

「将来、介護士になりたい。」小さい頃から介護という仕事に興味を持っていた私は、母にそう告げました。すると母から「介護の仕事はすごく大変。だからやめてほしい。」、といういわれなきことと、人のために働きたいという気持ちからの「介護士に」という言葉でした。仕事をしている母を見て介護士にと思っていたのですから、母が自分の仕事を持っていないとは思いません。それでも反対をしたのには、その仕事の大変さや給料のことなどがあったからだと思います。

最近では高齢者が高齢者を介護する「老老介護」という言葉が耳にします。老老介護が増える原因は、現在の日本の高齢化が進んでいること、介護士を目指す若者が減っていることだと思えます。介護士を目指す若者がいないとは思いません。人のためになる仕事、現在の社会の状況の両面を考えると、介護の仕事は選択肢の上位に出てくるはず。それなのになぜと考えると、母の言った「介護の仕事はすごく大変」という言葉には給料が労働に見合わない、給料が安いということが関係していると思うのです。私はこれらの問題を改善するために、二つの方法があると考えます。まず、給料を増やし、労働に見合うものにしていかないといけないと思うのです。仕事に誇りを持って、生活が苦しいと心の余裕がなくなります。大切な介護という仕事を、胸を張ってやっていくためにはお金も必要です。

もう一つは、介護現場の機械化です。介護ロボットができたというニュースも聞いたことがあります。介護士の体の負担を軽減するためにも、ロボットなど、もつと導入すべきだと思います。お金の問題は、国の補助金などで解決できそうです。

これらのことを考えていけば、若者が介護現場に増え、老老介護などの問題も解決していけるように思うのです。両親とも相談し、私は医療にも携わることのできる看護師を目指すことにしました。看護師だから介護はしないということはありません。高齢者が多い高知県では、看護師も介護を担うことがあり、と思います。看護体験に行った時、患者さんをベッドから車いすに移動させたり、食事の介助をしたりしていました。そこには介護の技術も必要なのです。常に笑顔で患者さんが安心して過ごせるように支援する、これはまさに介護です。その時の看護師と介護をする母の姿が重なりました。介護は大変な仕事だけれど、看護と同じように大切な仕事なんだと伝えたいと思います。

将来は、介護士の母からも、多くのことを学び、目配り、気配り、思いやりを忘れず、患者さんとのコミュニケーションを大切にできる看護師として、高齢化が進む高知県で活躍したいと思えます。

『私たちに出来ること』

高知県立城山高等学校二年 武田那緒さん

高校の部
入選

みなさんは「社会問題」と聞いてどのような問題か、思い浮かべますか。

私がよく耳にする社会問題は「高齢社会」です。この「高齢社会」は私にとって決して無関係だと言えない社会問題ではありません。つい最近、この問題について深く考えさせられる出来事がありました。

私の祖母は、曾祖母の介護をもう十年以上続けています。いわゆる「老老介護」です。曾祖母はアルツハイマー型認知症を患っており、よく徘徊し、いなくなるのが何度もありました。祖母だけでなく、よく徘徊し、いなくなるのが何度もありました。祖母だけでなく、その日のうちに発見できなかったことがありました。私は祖母に、「なんでちゃんと面倒みなかったか。おばあちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん、おじいちゃんに迷惑をかけたよ。」と、ひどいことを言っていました。その数日後、曾祖母が見つかったと連絡があり、その場所へ駆けつけると、消防の方が祖母に「見つかったよかっただけだね。老老介護は大変ですから、近くに若いお孫さんかいるのでしたら、無理をせず頼ってみたいですか？」と言っているのを見て、私は介護を祖母に任せっきりで、何も協力できていなかった上に、ひどいことを言ってしまったと後悔しました。そんな私に二人は「一緒に探してくれてありがとう。」と言ってくれました。あんなにひどいことを言ったのに、と思う反面、「ありがとう」と言われて嬉しく思いました。少し手伝ってこんなに喜んでくれるのなら、もっと優しくしたいと思えました。しかし同時に、優しくするだけでは、この問題は解決しないとも思いました。高齢者の方が安心して、そして快適に生活を送るためにどんなことが私にできるのか考えました。

「高齢社会」は、介護する側もされる側も大きなデメリットが目立ちます。そのデメリットを少しでも軽減するためには、地域のデイサービスの様子や施設を若い人たちが見学する機会を作り、少しでも介護を身近に感じてもらうことが必要だと考えました。

以前の私は「高齢者は動きが遅いし、若い人に相手にしてもらえないからかわいそう。」という言葉聞いた時「確かにそうかも。」と思うことがありました。しかし、高校で福祉の授業を通し、介護される人をマイナスではなく、プラスにとらえていくことが大切だと学び、この考え方は違うんだ、ということに気づきました。介護は、この先、私たちの生活と密接にかかわってきます。介護に対する無知や無関心を少しでも減らし、介護される人やその家族が笑顔で過ごせるように工夫をしていくことが大切です。

『介護について考える』

高知県立高知農業高等学校三年 手島みくさん

高校の部
優秀

私の曾祖母と祖母は四万十町に住み、山の中にある旅館を経営しています。自然豊かできれいな所です。しかし、私たちが住んでいるところからは、ずいぶん離れており、長い休みや正月にしか行くことができません。地域にも同じような方は多く、高齢者ばかりの地区になってしまっています。さらに、近くに病院はありません。一番近いところでも山道を一時間かけていくしかありません。高齢者にとっては不便なところです。高知県にはこんな場所がたくさんあります。

曾祖母は九十六歳ですが、まだ畑仕事もするなど、元気に過ごしています。七十歳を超える祖母も、昔、乳がんを患ったと言いますが、病気を感ぜさせない元気さです。でも、みんながずっと元気に過ごすのは無理な話です。人は必ず老います。人は必ず死にます。それは、人生を終わるまで、健康で元気に過ごすことができないこと。曾祖母、祖母に限らず、誰に対しても同じ様にやってくるのです。要介護になったりする人もいます。そのような人はもう仕方ないとあきらめるしかないのでしょうか。もしそれが、私の曾祖母や祖母など家族だったら仕方ないです。それは、私の曾祖母や祖母、たまたま寝たきりになったとしても、意思の疎通だけは、と思うのです。

私は将来、言語療法士になりたいと思います。言語療法士は、気持ちや考えを伝える言葉、発声、発音などの機能コミュニケーションに問題がある方に対してサービスし、自分らしい生活をしていけるように支援していくことが仕事です。また、家族などに患者のハンディキャップを軽減するための指導を行うことも大切な仕事です。さらに、寝たきりで、摂食・嚥下に問題のある人にも対応します。

話す、食べるは人間にとって大切なことです。その大切なことができず、大きな悲しみだと思えます。特に高齢者は、できないストレスで、生きる気力を失うこともあるかもしれません。誰もが豊かに生活を送れるように、多くの知識や経験を持ち、多くの人のサポートができるようにになりたいと思います。

九十六歳の曾祖母。たとえ離れて暮らしたとしても、大切に思う気持ちはあります。介護は寝たきりの人の世話をすることだけだとは思っていません。相手を大切に、思いやることも介護だと思っています。

今、私ができることを電話でも伝えていこうと思います。言語療法士になりたいと思っていること、多くの人をサポートしたいこと、もちろん、ひいおばあちゃんのこと大切に思っていることなど…。私の頑張りも伝えながら、介護についても考えていこうと思います。

～介護の仕事の魅力、発信!～

こうち 介護の日

第9回

ポスター・作文コンテスト

平成30年11月
高知県

11月11日 介護の日

人と向きあい
笑顔をつなく、
介護のしごと